

2021.10.20 付の朝日新聞の連載小説「また会う日まで・431号」に笠岡が登場、漁港としての説明のついでに「とと道」が紹介されました。今後の展開分かりませんがまずはご覧ください。



また会う
日まで

431

池澤夏樹・作
影山 徹・画

東京から笠岡へ 19

笠岡は穏やかな町だった。わたしにとっては何よりも海に面しているのがありがたかった。誕生以来、海はいつもわたしの近くにあった。築地の水路部に勤務していた時はちよつと足を延ばせば海を見ることができた。海軍の敷地の南西の角に出ると東京湾が遠望できた。

水路部の第三部は気象担当だが、今は独立して一部は千葉県の松戸に移っている。気象だから海の近くである必要はないのだが、わたしなら辛いかなと思つた。久我山の井の頭分室でも潮の匂いはしない。

笠岡に到着して、借り上げた家に家族と取まり、笠岡高等女学校にある水路部第一分室の状況を掌握する。この町には空襲の対象になる軍事施設が何もない。まずは安心と思つたことだった。

女学校の村土先生に少し詳しくこの地のことを聞いた。

もとは瀬戸内航路の潮待ち港として栄えたという。これはわたしも興味を持って調



べたことがある。昔の船は潮と風、それに櫓や櫂で動いた。遠い旅には岸沿いにたくさん港を用意しておいて一つまた一つと巡って移動する。

瀬戸内海を西に行くのであれば、大阪湾の難波津を出て、大浦、明石津、室津、牛窓津、多麻ノ浦、鞆ノ浦と進む。笠岡の港は多麻ノ浦の先、鞆ノ浦の手前にあつたわけだ。その先は九州に至るか、四国の熱田津の方に行くか、あるいは関門海峡を抜けて朝鮮や唐まで渡るか。

漁港としても栄えたらしい。

「岡山県の内陸に高梁という町がありましてな」と村上先生は言われる。「その近くの吹屋というところに銅山があつた。たくさん人が働いておりました。そこへ笠岡から獲れたての魚を運ぶのですよ。十五里ほどの道を飛脚みたいに交代で走つて十二時間着いたとか。これを『とと道』と呼んでおりました」

「その港は？」

「昭和の御代になって、ほら船が大きくなつたでしょう。こゝは水深が浅いから大きな船は入れない。それで廃れました」

「港はどこにあつたのですか？」

「この海沿いの金浦とこつとこつとで



池澤夏樹氏は桃太郎伝説に関して従来より吉備人としては誠にごもつともという考えを展開されています。

朝日12.6

終わりと始まりと



池澤夏樹

桃太郎と教科書

前衆議院議員の義家弘介さんが産経新聞で多くの文章を論じてくださった。

ぼくが書いたのは「狩猟民の心」というエッセーで、平成10年度から14年度まで高校の教科書「国語I」（筑摩書房）の教科書で使われた。義家さんは、これは子供たちに供するにふさわしくない内容だと言われる。

以下、最初はぼくの文の引用――
《日本人の（略）心性を最もよく表現している物語は何か。ぼくはそれは「桃太郎」だと思う。あれは一方的な征伐の話だ。鬼は最初から鬼と規定されているのであって、桃太郎一族に害をなしたわけではない。しかも桃太郎と一緒に行くのは友人でも同志でもなくて、黍団子というあやしげな給料で雇われた傭兵なのだ。更に言えば、彼らはすべて士官である桃太郎よりも劣る人間以下の兵卒として（略）、動物という限定的な身分を与えられている。彼らは鬼ヶ島を攻撃し、征服し、略奪して戻る。この話には侵略戦争の思想以外のものは何も無い》

（ここからが義家さんの意見）
へわが国では思想及び良心の自由、表現の自由が保障されている。作者が作家としてどのような表現で思想を開陳しようとも、法に触れない限り自由である。しかし、おそらく伝統的な日本人なら誰もが啞然とするであろう一方的な思想と見解が、公教育で用いる教科書の検定を堂々と通過して、子供たちの元に届けられた、という事実には私は驚きを隠せない。

例えばこの単元を用いて、偏向した考えを持つ教師が「日本人の心性とは、どのようなものである」と筆者は指摘しているか。漢字4字で書きなさい」という問題を作成したら一体どうなるか。生徒たちは「侵略思想」と答えるしかないだろう。

うーん、困ったな。
あのエッセーでは「伝統的な日本人なら誰もが啞然とする」という、そのところが言いたかったのだが、理解していただけなかったらしい。ぼくは子供たちに啞然としてほしいのだ。

知的な反抗精神養って

ぼくにも反省はある。
「日本人の（略）心性」というのは間違っていた。悲しいことながら、本当は人間の心性は「と書くべきであった」。

二十年以上前に「狩猟民の心」を書いた時は、これは自分のオリジナルな発見だと得意になった。世間の桃太郎イメージを逆転できた！

しかしずっと前に同じことを明治の偉人が言っていたのだ――
「も、たるふが、おにがしまにゆきは、たからをとりぬくといへり。けしからぬことならずや。たからは、おにのだいじにして、しまいおきしものにて、たからのぬしはおになり。ぬしあるたからを、わけもなく、とりにゆくとは、も、たるふは、ぬすびと、もいふべき、わるものなり。もしまたそのおにが、いつたいわるきものにて、よのなかのさまたげをなせしことあらば、も、たるふのゆうきにて、これをこらしむるは、はなはだよきことなれども、たからをとりてうちにかへり、おぢいさんとおば、さんにあげたとは、た、よくののためのしごとにて、ひれつせんはんなり。」

福沢諭吉が自分の子供のために書いた『ひびのおしへ』である。現代語訳が慶應義塾大学出版会から出ている。

桃太郎のふるまいは「ただただ欲のための仕事にて、卑劣千万」なのだと言吉さんは言う。ぼくが書いたことはぜんぜんオリジナルではなかった。

侵略と言って悪ければ進撃と言えはいいか。

日本で最初に作られた長篇アニメに「桃太郎の海鷲」という作品がある。モノクロで三十七分（ネットでは探せば見られる）。海軍省の指揮のもと、芸術映画社が作った。テーマは真珠湾攻撃で、実際、アニメとしてすごいぶんよくできている。飛行シーンや細部のくすぶりなど宮崎駿を先取りしていると言ってもいい。

桃太郎が空母に残って激励するばかりで部下を戦闘地域に送るあたりは史実の反映かもしれない……というのは深読みが過ぎるか。

もう一つ例を挙げようか。
日本新聞協会広告委員会が開催した「2013年度新聞広告クリエティブコンテスト」で最優秀賞に選ばれ、東京コピーライターズクラブの2014年度TCC最高新人賞を受賞した作品。鬼の子が泣いている絵の上に「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました。」というつたない子供の字のコピーがある。

教育というのは生徒の頭に官製の思想を注入することではない。そんなことは教師出身の義家さんは先刻ご承知のはず。一つのテーマに対していかに異論を立てるか、知的な反抗精神を養うのが教育の本義だ。ぼくの桃太郎論を読んだ生徒が反発してくれればくれるだけ、ぼくは嬉しい。



矢掛の温羅像



矢掛神社